



TITLE:

<大會抄録>唐代河北藩鎮における 交易について

AUTHOR(S):

畑地, 正憲

CITATION:

畑地, 正憲. <大會抄録>唐代河北藩鎮における交易について. 東洋史研究
1974, 33(3): 521-521

ISSUE DATE:

1974-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153552>

RIGHT:

く。

(一) 棉作の導入は商人・高利貸の農民收奪の機會を擴大し、農民の債務奴隸化が進行する。

(二) このような農民經濟の變化は、不可避免的に地主制に新しい對應をとらせることとなる。棉作地では前納定額貨幣地代が支配的となり、從來の大地主のほかに、新たに商人・高利貸などから轉身した小地主群が形成される。かくして、一九三〇年代の河北省の一農村では農民層分解の基礎の上に、富農經營と寄生地主化とが農民搾取の形態上で相對立しながら進行していく。

唐代河北藩鎮における交易について

畑地正憲

唐代における河北藩鎮（盧龍・魏博・成德等三節度使）の反動的・獨立的動きについては周知のことである。この河北藩鎮の獨立的動きは、強力な藩軍を編成し、支配地域（藩道）における稅物等の完全な私有によって支えられていた。これら軍事・財政等の側面については、先學によって明かにされたところである。

ところで、藩道と他地域との間の交易による物資流通を考察することは、河北藩鎮の經濟的側面を解明し、その地域性を明かにする上で重要なことであると考ええる。

河北藩鎮における交易では、北邊におけるものと海上交易とを主要なものとしてあげることができる。ここでは、河北における

「行」の成立や、海上交易での新羅人の活躍、藩鎮の唐朝への進貢物等を手がかりとして、河北藩鎮における交易の問題を考察する。

「開禧用兵」と韓侂胄政權

衣川 強

南宋第四代皇帝寧宗の開禧二年（一二〇六）、四十餘年にわたる宋金兩國の平和狀態が崩壊し、戰爭が開始された。南宋の權力者韓侂胄が、大いなる功績を立てて自己の立場を強化するために指導した戰爭であると言われ、當時の資料では「開禧用兵」と記録されている。この戦いは韓侂胄を謀殺し、その首を金へ送ることによって終結し、宋金間に五回目の講和が成立した。

韓侂胄の專權時代は寧宗朝の前半に當る。その間、道學とその學者の彈壓（慶元黨禁）を敢行し、ついで「開禧用兵」へ突入していった。この二つの事件は、韓侂胄を悪人として評價することを決定した。しかし、政治の動きとしてとらえてみれば、この事件は決して韓侂胄一人の活躍によってなされたものではない。韓侂胄一派とその反對派の間に複雑な抗爭があった。さらに、看過し得ない要素として、いわゆる學者の動向がある。

韓侂胄一派が、開戦へ進むためにどのような人物をいかに配置したのか。反對派は、どのような経過でその權力を失ったのか。これらの問題を、中央政界の動きを軸に、「開禧用兵」をめぐる韓侂胄政權の人的構成を分析することによって明らかにしたい。